



7510 重伝建地区脇町における景観変容に関する研究 (歴史的景観(2), 都市計画, 2014年度日本建築学会大会(近畿)学術講演会・建築デザイン発表会)

横山, 泰
山崎, 寿一
山口, 秀文

(Citation)

学術講演梗概集, 2014(都市計画):1109-1110

(Issue Date)

2014-09-12

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003080>



重伝建地区脇町における景観変容に関する研究

正会員	○横山 泰*
同	山崎 寿一**
同	山口 秀文***

脇町	重要伝統的建造物群保存地区	景観
修景	目視調査	

1. はじめに

1. 1 研究の目的

徳島県脇町は 1988 年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。本研究では選定後から約四半世紀が経つ現在、脇町の景観がどのように変容したのかを明らかにし、特に修景事例に着目することで、現在も住民が住み続ける重伝建地区で景観への配慮がどのような形態で表れているのかを明らかにし、今後の脇町の課題を示すことを目的とする。

1. 2 研究の方法

『伝統的建造物群保存対策報告書』²⁾より、1986 年の伝統的建造物群保存対策事業での景観評価調査と、2013 年 10 月に行った目視調査での景観評価(伝建地区主要道路沿い)の結果を比較・分析し、脇町地区の景観がどのように変化したのかを示す。さらに、その変化の中で修繕・修景など景観的に改善点がみられる実態を示す。

2. 景観の変容

2. 1 重伝建選定時の景観

1986 年の調査での景観評価では、景観的に優れていたり、伝統的な建物で正面の改造が少ない建物・工作物(A)、伝統的な建物で正面の改造があるものの比較的新しい建物であっても伝統的様式を保持している建物・工作物(B)、伝統的な建物であっても、正面の改造が大きい景観を壊していないもの、新しい建築・工作物で容量が小さいもの(C)、景観を壊している建物・工作物で容量の大きいもの、素材が新しいもの(D)、の4段階で評価している。重伝建地区内の主要道路沿いでの評価の



図1 1986 年景観評価 (伝統的建造物群保存対策報告書²⁾より)

割合は A が 26 件、B が 18 件、C が 10 件、D が 20 件であり、伝統的な建物が多く残っているが景観にふさわしくない建物・工作物も約 3 割を占めている状態であった。

2. 2 現在の景観

2013 年の目視調査での景観評価は、重伝建地区選定後から現在までに景観がどのように変容したのかに着目し、伝統的建物で景観に優れている(○32 件)、伝統的建物であるが、保存状態が悪い(△19 件)、景観への配慮がみられる新しい建物・工作物(□12 件)、景観を壊している建物・工作物(×14 件)という 4 段階で評価した。

評価事例として、写真 1 は、伝統的な様式の建物であり、ほぼ当時の状態で保存されていることから○と評価した。写真 2 は、伝統的な様式の建物であるが、2 階部分の漆喰が剥がれ下地の露出、商店看板の破損など保存状態が悪いことから△と評価した。写真 3 は、新しい工作物ではあるが景観に配慮した素材、デザインとなっていることから□と評価した。写真 4 は、現代的な看板建築であり、前面道路からセットバックしているものの、景観への配慮がみられないことから×と評価した。

調査では、伝統的様式の建物は多く保存されているが保存状態が悪く景観に影響を与える事例も見られた。しかし、新しい建物・工作物であるが景観に配慮している





図2 2013年景観評価（住宅地図¹⁾をベースに作成）

事例や1986年時点では景観を壊している」と評価されていたものが修景を行い景観に配慮するようになった事例も見られた。この調査により、老朽化や住民の生活に合わせた修繕や修景による改善などの変化が主な変容であることがわかった。また、近年の傾向としては駐車場への改築が多いこと、観光地化による商店への改築も増えており、景観を維持しながら住民の生活や観光地化に対応する修繕が多くなっている実態も美馬市の伝建地区担当の方へのヒアリングからわかった。

2. 3 重伝建選定時と現在の比較

脇町の伝建地区内でどのような変容の傾向があるのかを把握するため、1986年と2013年の重伝建地区主要道路沿いの景観評価の比較を行った。景観的に優れた状態を維持、修繕修景など景観的な改善点がみられる、建物の状態が悪くなっている、景観的な配慮がない状態を維持、の4段階で分類し図3に示し、件数は表1にまとめた。

景観的に良い状態で変化がないもの（うまく保存されている）が約半数を占める反面、景観的に悪い状態で変化がないものも約25%と多いことがわかる。また、管理されず老朽化してしまい、景観的に悪い変化が起こっているものも少なくなく、修景が必要である。また、景観に良い変化があった10事例の変化の内容は表2に示すとおりである。



図3 景観評価の比較（住宅地図¹⁾をベースに作成）

表1 景観評価の比較

		変容実態	
		変化なし	変化あり
景観評価	良い	31	10
	悪い	15	10

表2 修景の内容

修景内容
A 漆喰塗りで瓦葺の塀
B 住宅部分を生垣で隠し、車庫を景観と調和するデザインに改築
C 植栽により家屋を隠す
D 1F部分を車庫に改築、景観と調和するデザイン
E 空き地に、板塀、門
F 街路に面する北面を板張りのファサードに修景
G 景観を壊す建物を撤去し、板塀がある駐車スペースに
H 景観を壊す建物を撤去し、板塀がある駐車スペースに
I 街路に面する北面を白く、屋根を部分的に瓦葺に修景
J 街路に面する北面を板張りのファサードに修景

タイプ	街路に対し生垣や塀を用いて家屋・空き地を隠す	景観と調和するデザイン、素材を用いて1階の一部を駐車スペースへと改築	景観を壊していた建物を撤去し空き地へと戻す	街路に面する建物・工作物立面を景観と調和するデザイン・素材で修景
変化前				
変化後				

図4 変化のタイプ

重伝建選定から現在までで、景観に対して起こった良い変化は主に4タイプであることがわかった（図4）。A、B、C、Eで見られる、街路に対し生垣や塀を用いて家屋・空き地を隠すタイプ、B、Cで見られる、景観と調和するデザイン・素材を用いて1階の一部を駐車スペースへと改築するタイプ、G、Hで見られる、景観を壊していた建物を撤去し空き地へと戻すタイプ、F、I、Jで見られる、主要街路に面する建物・工作物の立面を景観と調和するデザイン・素材を用いて修景するタイプである。

3. まとめ

1968年の重伝建選定当時と、2013年の現地目視調査での景観評価を比較すると、この25年間で景観的に変化した部分を把握することが出来た。そのうち、景観的に良い変化がみられたものには、4つのタイプがあることが明らかとなった。保存状態の悪い建物も多く残っている現状であるが、住民の小規模であるが自主的な修景や、住民の現代の生活に合わせた変容もあり、この変化の中に、今後脇町で景観を守りながら住み続けるための可能性があるのではないかと考える。

また、本研究の調査は目視での景観評価を行ったため、各事例の行政からの補助内容や、自治会との関わりなど把握することはできなかったことは今後の課題である。

参考資料

- 1) ゼンリン住宅地図
- 2) 日本の町並み調査報告書14、四国地方の町並み

*神戸大学大学院 博士前期課程

**神戸大学大学院 教授・博士(工学)

***神戸大学大学院 助教・博士(工学)

* Graduate School of Engineering, Kobe Univ.,

** Prof., Graduate School of Engineering, Kobe Univ.,

*** Assistant Professor, Graduate School of Eng., Kobe Univ., Dr. Eng.